

## 第二百八十三話 清冽たる精神性の発露



西新宿の新宿住友ビル 33 階の「平和祈念展示資料館」  
(<https://www.heiwakinen.go.jp>) で開催されていた知覧特攻平和会館所蔵資料展「特攻隊員が遺した言葉」を家内と共に訪れた。

酷暑もあつてか資料館を訪れる人は少なかったが、それでも若い人が熱心に遺書や諸資料を厳粛な顔貌で眺めていた。約 20 点の遺書・書簡類が展示されていた。

作戦・戦術としての特攻は度々指摘しているように統率の外道であり、認めるものではないが、特攻隊員の偽らざる吐露された真情には心を揺り動かされる。(関連メモランダム 220 話 脈々たる DNA)

### 1 特攻隊員の残した言葉の内容上の区分

北影雄幸著「特攻隊最後のことば」(光人社 NF 文庫)では、以下の 13 区分で隊員のことばを紹介・解説している。

『1 無名戦士の賦 2 揺るぎない祖国愛 3 清らかな心情 4 誇り高き自負心 5 捨石の思想 6 不屈の特攻魂 7 男子の本懐 8 散華の美学 9 透徹した死生観 10 死所を得る 11 決死の覚悟 12 父母への感謝 13 人を恋うる誌』である。

### 2 「遺書・最後のことば」を読んで

- (1) 特攻隊員の遺書や最後の言葉は、戦場心理や異常心理に陥った訳でもない、血気にはやった訳でもない、付和雷同では決してないのだ。それは、静かな佇まいを感じさせ、言葉や遺書には諦観とも違う静かな精神性が込められている。
- (2) 特攻隊員の崇高な自己犠牲、無私精神、日本男児の美学は、かつての敵国をも含めて称賛されている。当然だ。崇高な自己犠牲に感動せぬ者は居ない。美談化するな、美化するなと批判するのは日本ぐらいのものか。
- (3) 若桜は「必死」によって、「死以上のもの」を求めていた。代償を求めない純粋なる行為こそ日本精神の精華である。
- (4) 特攻は志願か強制か論、同調圧力があつたので特攻を志願した等の論を是とするか？そういう俗論から超越した存在こそ「特攻」である。  
「昭和は遠く 生き残った特攻隊員の遺書」松浦喜一著 径書房刊には、興味深い記述がある。『私は「特攻は志願か、命令か」という問題も提起してきた。そして私は、戦死された真の特攻隊員たちは、上からの命令ではなく、自分が自分に与える命令、すなわち志願によって出撃突入したのであると書いた。特攻突入は上からの命令では存在し得ないと結論付けた。』(同書 244p)
- (5) 国家が危機に瀕した状況に鑑み、愛する者や郷土ひいては国家に対する強烈な使命感・責任感が彼等を突き動かしたのだ。
- (6) 特攻そのものに対する批判と特攻隊員に対する非難を一緒に論ずるべきではない。
- (7) 日本は戦争には敗れたが、特攻隊員や敢闘した陸海軍将兵が示した高い使命感・責任感の世界から称賛され、日本に対する高い信頼感の基盤となっているのである。
- (8) 死への恐怖心、生への願望がなかった筈はないが、彼等はそれを超克し、自らを納得させ、残りし者の幸せのために従容として十死零生への道を進んだ。
- (9) 陸士・海兵出身者等軍人を志した者はそれなりの死生観を確立していたと思われるが、先日までは普通の学生等であった弱冠二十歳前後の若者が示した高い精神性は今の日本にはその欠片すら存在しないように見える。が、我々の心奥深く眠っており、一旦緩急あれば目覚めるものと信じる。

(F)